

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	Effectiveness of laparoscopic subtotal cholecystectomy: Perioperative and long term postoperative results
別タイトル	周術期および長期成績からみた腹腔鏡下胆嚢亜全摘術の有用性
作成者（著者）	田村, 晃
公開者	東邦大学
発行日	2014.01
掲載情報	東邦大学大学院医学研究科 博士論文 内容の要旨及び審査結果の要旨. 63.
資料種別	学位論文
内容記述	主査: 五十嵐良典 /タイトル: Effectiveness of laparoscopic subtotal cholecystectomy: Perioperative and long term postoperative results /著者: Akira Tamura, Jun Ishii, Toshio Katagiri, Tetsuya Maeda, Yoshihisa Kubota, Hironori Kaneko /掲載誌: Hepato Gastroenterology /巻号・発行年等: 60 (126):1280-1283, 2013 /
著者版フラグ	none
報告番号	32661乙第2804号
学位授与年月日	2014.1.23
学位授与機関	東邦大学
DOI	info:doi/doi: 10.5754/hge13094
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD63243668

学位番号乙第 2659 号

学位申請者 : 田 村 晃

主 論 文 : Effectiveness of laparoscopic subtotal cholecystectomy:
Perioperative and long-term postoperative results

(周術期および長期成績からみた腹腔鏡下胆嚢亜全摘
術の有用性)

著 者 : Akira Tamura, Jun Ishii, Toshio Katagiri, Tetsuya Maeda,
Yoshihisa Kubota, Hironori Kaneko

公 表 誌 : Hepato-Gastroenterology 60 (126) : 1280-1283, 2013

論文内容の要旨 :

(はじめに)

現在広く普及した腹腔鏡下胆嚢摘出術 (Laparoscopic cholecystectomy:以下 LC) は、その手術適応の拡大により高度炎症やそれに伴う線維化により時に胆嚢組織を一部残存し手術を終了せざるを得ない場面に遭遇することもあり、このような手技は腹腔鏡下胆嚢亜全摘術 (Laparoscopic subtotal cholecystectomy:以下 LSC) と呼ばれている。

今回われわれは当施設で施行した LSC を炎症の局在と程度から 3 グループの手術手技に分類し、周術期成績を通常の腹腔鏡下胆嚢摘出術 (以下 s-LC) と比較するとともに、LSC の長期成績を検討し、LSC の有用性の検証を行った。

(対象と方法)

2004 年 1 月から 2010 年 12 月までに当施設で施行した LSC89 例を含む LC 760 例を対象とした。

LSC 各々の手技は、肝床部からの胆嚢剥離が困難なため胆嚢前壁を切除し、粘膜面の焼灼は行うものの肝床側胆嚢壁を残し、胆嚢管は clip あるいは endoloop®で処理する術式は LSC-I、calot's triangle の炎症が高度であるため無理に胆嚢管を露出せず、胆嚢頸部を全周性に遊離し、胆嚢管接合部近傍で管腔を自動縫合器あるいは endoloop®を用いて閉鎖する術式は LSC-II となる。そして胆嚢頸部全周の遊離が不可能で、胆嚢壁断端の縫合閉

鎖を要する術式が LSC-Ⅲとなる。

周術期の検討項目として手術時間、術中出血量、術後炎症所見、術後体温最高値、術後入院日数、早期合併症の有無を LSC 群と同期間に施行された LSC 群を除いた通常の LC 群（standard LC 群：以下 s-LC 群）671 例とを比較し、さらに LSC 群を LSC-I、LSC-II、LSC-Ⅲのそれぞれに分け、同じ検討項目で s-LC 群と比較した。

また開腹移行率、術中胆道損傷率は LSC 導入以前（1992～2001 年）に当科で施行した開腹移行例を含む LC415 例と比較した。さらに LSC における再発結石や胆嚢癌などの術後長期成績を検討した。

（結果）

- s-LC 群と LSC 群の比較 -

LSC 群において手術時間の延長、出血量の増加、術後炎症所見の高値が見られ、術後入院日数も延長が見られた。s-LC 群に 1 名の術後胆汁漏を認めた以外は、s-LC 群、LSC 群ともに手術に起因した術中・術後合併症は認めなかった。

- s-LC 群と LSC-I、LSC-II、LSC-Ⅲそれぞれの比較 -

s-LC 群と LSC-I、LSC-II、LSC-Ⅲそれぞれの比較においては、手術時間は LSC-I、II、Ⅲ全てで s-LC 群より延長していたが、出血量は LSC-II のみ増加していた。

術後炎症所見では WBC 数は第 1 病日の LSC-I、LSC-Ⅲに上昇が見られたが、他は有意差がみられなかった。しかし CRP 値においては第 1 病日、第 3 病日ともに LSC-I、II、Ⅲ全てで s-LC 群より高値であった。

術後体温最高値には有意差は見られず、術後入院期間は LSC-Ⅲのみ有意に延長していた。

- LSC 導入後と LSC 導入前の LC における開腹移行と術中胆道損傷の比較 -

LSC 導入以後、手術既往による腹腔内癒着等による開腹移行を除いた、実際に胆嚢摘出術に入ってから開腹移行率は 6.75%（28 例／415 例）から 1.81%（14 例／774 例）へ減少し、また胆道損傷率も 0.48%（2 例／415 例）から 0%（0 例／774 例）へと低減していた。

- LSC 群における長期成績 -

術後 1.5 年から 8 年の長期的成績では、遺残胆嚢癌、腹腔内膿瘍形成、遺残胆嚢炎は LSC 群全般で認めなかったが、LSC-Ⅲで術後 2 年後以降の画像検査で 3 例（3 例／26 例 11.5%、LSC 全体では 3 例／89 例 3.37%）に遺残胆嚢内に結石の再発が見られた。うち 1 例は膵癌発症のため手術時に結石は摘出されたが、他 2 例は無症状でもあるため経過観察としている。

（まとめ）

LC 対象疾患は基本的に良性疾患であり、胆道損傷などの合併症を起ささないためにも、胆嚢管露出にこだわらない姿勢も必要と考えている。炎症や繊維化により解剖理解が不明瞭となった症例において胆道損傷などの重篤な術中合併症を回避でき、さらには開腹移行も低減させる LSC は有用な術式の一つと考えられた。また LSC 症例の長期観察は本手術の有効性を検討するうえで、極めて重要であるが、今まで詳細な長期観察の報告はほとんど見られない。我々の長期間の観察では、LSC-Ⅲ症例に認めた結石の再発以外は、遺残胆嚢癌、腹腔内膿瘍、遺残胆嚢炎などの発症は認めておらず、これらの発症の可能性は低いものと考えられた。

1. 論文審査の要旨および担当者

学位番号乙第 2659 号	氏 名	田 村 晃
論文審査担当者	主 査	五 十 嵐 良 典
	副 査	住 野 泰 清
	副 査	島 田 英 昭
	副 査	斉 田 芳 久
	副 査	瓜 田 純 久
<p>論文審査の結果の要旨：</p> <p>腹腔鏡下胆嚢摘出術（Laparoscopic cholecystectomy:以下 LC）は、良性胆嚢疾患に広く施行されているが、高度炎症やそれに伴う線維化により時に胆嚢組織を一部残存し手術を終了する場合がある。このような手技は腹腔鏡下胆嚢亜全摘術（Laparoscopic subtotal cholecystectomy:以下 LSC）と呼ばれている。Palanivelu の分類に従って、LSC を炎症の局在と程度から 3 グループの手術手技に分類し、周術期成績を通常の腹腔鏡下胆嚢摘出術（以下 s-LC）と比較するとともに、LSC の長期成績を検討し、LSC の有用性の検証を行った。</p> <p>対象は、2004 年 1 月から 2010 年 12 月までに東邦大学大森病院で施行した LSC89 例を含む LC 760 例を対象とした。LSC 各々の手技は、肝床部からの胆嚢剥離が困難なため胆嚢前壁を切除し、粘膜面の焼灼は行うものの肝床側胆嚢壁を残し、胆嚢管は clip あるいは endoloop® で処理する術式は LSC-I、calot' s triangle の炎症が高度であるため無理に胆嚢管を露出せず、胆嚢頸部を全周性に遊離し、胆嚢管接合部近傍で管腔を自動縫合器あるいは endoloop® を用いて閉鎖する術式は LSC-II、胆嚢頸部全周の遊離が不可能で、胆嚢壁断端の縫合閉鎖を要する術式が LSC-III とした。</p> <p>方法は、周術期の検討項目として手術時間、術中出血量、術後炎症所見、術後体温最高値、術後入院日数、早期合併症の有無を LSC 群と同期間に施行された LSC 群を除いた通常の LC 群（standard LC 群：以下 s-LC 群）671 例とを比較し、さらに LSC 群を LSC-I、LSC-II、LSC-III のそれぞれに分け、同じ検討項目で s-LC 群と比較した。また開腹移行率、術中胆道損傷率は LSC 導入以前（1992～2001 年）に当科で施行した開腹移行例を含む LC415 例と比較した。さらに LSC における再発結石や胆嚢癌などの術後長期成績を検討した。</p> <p>結果（Table 3）として、LSC 群において手術時間の延長、出血量の増加、術後炎症所見の高値が見られ、術後入院日数も延長が見られた。s-LC 群に 1 名の術後胆汁漏を認めた以外は、s-LC 群、LSC 群ともに手術に起因した術中・術後合併症は認めなかった。</p> <p>s-LC 群と LSC-I、LSC-II、LSC-III それぞれの比較においては、手術時間は LSC-I、II、III 全てで s-LC 群より延長していた（Figure 1）が、出血量は LSC-II のみ増加していた（Figure 2）。</p>		

術後炎症所見では WBC 数は第 1 病日の LSC-I、LSC-III に上昇が見られたが、他は有意差がみられなかった。しかし CRP 値においては第 1 病日、第 3 病日ともに LSC-I、II、III 全てで s-LC 群より高値であった (Figure 3)。術後体温最高値には有意差は見られず、術後入院期間は LSC-III のみ有意に延長していた (Figure 4)。

LSC 導入以後、手術既往による腹腔内癒着等による開腹移行を除いた、実際に胆嚢摘出術に入ってから開腹移行率は 6.75% (28 例/415 例) から 1.81% (14 例/774 例) へ減少し、また胆道損傷率も 0.48% (2 例/415 例) から 0% (0 例/774 例) へと低減していた。

術後 1.5 年から 8 年の長期的成績では、遺残胆嚢癌、腹腔内膿瘍形成、遺残胆嚢炎は LSC 群全般で認めなかったが、LSC-III で術後 2 年後以降の画像検査で 3 例 (3 例/26 例 11.5%、LSC 全体では 3 例/89 例 3.37%) に遺残胆嚢内に結石の再発が見られた。うち 1 例は膵癌発症のため手術時に結石は摘出されたが、他 2 例は無症状でもあるため経過観察としている。

LSC は、炎症や繊維化により解剖理解が不明瞭となった症例で、胆道損傷などの重篤な術中合併症を回避でき、さらには開腹移行も低減させる術式の一つと考えられた。LSC の長期観察の報告は、今までにほとんどなく、LSC-III 症例に認めた結石の再発以外は、合併症は認めておらず、有用な手術法と考えられた。

公開審査は、2013 年 11 月 27 日に医学部 3 号館 2 階ミーティングルームで行われた。

多数の質問がよせられた。LSC-II で出血が多いのは何故か？LSC-III は、癒着が高度なため無理をしなかったためと考えられる。また再発結石を 3 例認めたのは、何故か？LSC-III で認められており、遺残胆嚢部分が大きかったためと考えられた。胃切除後の症例は含まれているか？胃切除後の症例も含まれているが、特に LSC とは関連がなかった。胆嚢粘膜の焼灼方法は？電気凝固法である。PTGBD 症例に LSC が多いか？PTGBD から比較的早期だと癒着が少ないことがあり、術前の胆嚢炎の程度と施行時期に影響すると考えられた。胆嚢癌の併発が心配されるが？術中迅速診断は、悪性が疑われるときに施行している。また腹腔鏡で観察時に悪性が疑われたら、開腹手術に切り替えているなどの質疑応答が行われ、的確に回答した。

本研究では、LSC を施行することで、胆道損傷などの重篤な合併症を回避でき、開腹移行例も減少でき、長期の経過観察でも問題がなく、有用な手術法であることを証明した有意義な論文であり、学位に値すると判断した。

